

月曜寸言

中国の政治の動きは、つねに複雑かつ流動的であるだけに、その将来を予測することは難かしい。だが、論理的に考えれば

こうなるださう」ということは可能であり、中国研究に携わる者としては、そのような蓋然性を探索する義務があるのかもしない。

私は、周恩来の死の直後に多くの場所で発言を求められたとき、毛以後への時間が切迫している中国においては、当面、政治の激変を避けようとする拘束力が働くのではないかとみなし「拵林拵孔」運動や「水滸伝」

批判がそうであつたように、内のある深刻な路線闘争は今後も続するであろうが、いずれも透明なあいまいさのうちに終するのではないかと述べた。

考えたのは、「走資派」のな  
こそ、中国の当面の社会的  
家の要請に合致しているがゆ  
に、彼らはたとえ激しく批判  
されようとも、時は彼ら  
利するし、潜在的には広範な  
持基盤をもっているのではないか  
かとみなしたからにほかなら  
ない。

東思想」の絶対化過程における批判と抵抗の総体を想ひてき一 揭するだけの力があるのだらうか。

悼の論文や周囲の業績を回想した記事などをそれ以後掲載していくこととともに、事態の本質に迫る力が一つではなかろうか。今回の一連の事態のなかには、圧倒的多数の鄧小平批判のなかに、一方では周囲來歴批判、他方では江青批判の壁新聞

周恩来批判の影

中  
山  
傳  
記

てきて鄧小平失脚、中国の大混亂という見方を告げ、暗に私の見方が甘かったのではないかといつたような口ぶりであった。いずれも親しい編集者たったので、私としてもいさかつらかったが、まだ鄧小平の失脚を語るのは早計だと、抵抗した次第である。私がそのように

い。ここにこそ逆に、文革派の危機意識が存在するのである。果たして、その後の情勢を見ていると、「走資派」批判の動きは大学やマス・メディアなど特定の部署以外にはなかなか拡大せず、鄧小平らの失脚もまだ伝えられていない。今日の文革派に「走資派」という「毛沢

る「人民中国」の四月号は、周恩来追悼号のはすなのに表紙には毛沢東の新しい詞の方を大見出しで刷りこんでいる。この辺の問題は、周恩来を哀悼して全国各地から献ぜられた花輪が一月一九日を期して天安門前広場から撤去されたこと、「人民日报」はかの公式紙誌が周恩来追

「走資派」批判の核心はこのあたりにあるような気がする。なかじまみねお

治の激変を避けようとする拘束力が働くのではないかとみなし「拙林拙孔」運動や「水滸伝」

かつたが、まだ鄧小平の失脚を 拡大せず、鄧小平らの失脚をま  
語るのは早計だと“抵抗”した だ伝えられていない。今日の文  
次第である。私がそのように 革派に「走資派」という「毛派

月一九日を期して天安門前広場から撤去されたこと、「人民日報」ほかの公式紙誌が周恩来追

あたりにあるような気がする。  
なかじま みねお  
(東京外語大助教授)

治の激変を避けようとする拘束力が働くのではないかとみなし「拙林拙孔」運動や「水滸伝」

かつたが、まだ鄧小平の失脚を 拡大せず、鄧小平らの失脚をま  
語るのは早計だと“抵抗”した だ伝えられていない。今日の文  
次第である。私がそのように 革派に「走資派」という「毛派

月一九日を期して天安門前広場から撤去されたこと、「人民日報」ほかの公式紙誌が周恩来追

あたりにあるような気がする。  
なかじま みねお  
(東京外語大助教授)